

# 朝鮮通信使文芸資料(新出)をめぐって

管 宗次

## 要旨

朝鮮通信使の文芸資料は少なからず残されているが、その文雅交流においては雅号をもって署名したり、あまりにも断片的な資料のため埋もれてしまっているものに詩箋や短冊がある。それらの散らばったものを拾い集めていくことこそ、通信使の人々の日本の文雅人との交流における文雅応酬の生き生きとした姿を窺い知ることができる手段といえるのである。

本稿では、若き日の皆川淇園が明和元年の通信使来聘の折に、通信使宿所であった京都の本国寺を訪れたところ、同じく通信使との文雅応酬を望んで訪れていた近江守山宿の酒造家にして儒者の宇野醴泉と邂逅の一時を得たというエピソードを紹介しつつ、当時の文人の朝鮮通信使との文雅応酬にかける熱意にも言及した。

キーワード:朝鮮通信使、文雅応酬、皆川淇園、宇野醴泉、詩題、日東、富士山、金剛山

## はじめに

近世期、日本においては江戸時代、韓国においては朝鮮時代は、共に両国は西洋に対して、ごく一部(日本がオランダ王国に対して開国していた)を除けば鎖国状態にあり、数少ない善隣友好国として、その使節のやりとりは重要な意味をもっていた。朝鮮通信使の人々は大変優秀な人材が選抜されていたし、日本では儒教の浸透は民間にまで及び、在野(たとえば豊裕な町人で商人や酒造業者、農民でも大地主であった庄屋)の人々は儒教に見をいれて漢詩漢文に長じた者も多く、両国とも文治国歌としての実をあげている頃の交流であった。こうした両国の土壌は見逃してはならない。

日本と朝鮮は友好を基として、互いの使節派遣を行ったが、日本では前後十二回にも及ぶ朝鮮通信使を迎えた。

日本からの使節が朝鮮の国内を通過してソウルに至ることは許されていなかったことに対して、朝鮮通信使の一行は対馬から下関、瀬戸内海を経て室津、兵庫ときわめて風光明媚な場所を舟旅し、あとは大阪から陸路で枚方、淀から街道入り、東海道を経て將軍の居城である江戸へと行った。長いその往復の道中では、日本の文雅人の官途にある者、在野の者、あらゆる文芸学芸に熱心な人々が交流を求めて集まってきた。漢詩の応酬は勿論のこと、医学知識の質疑や伝授、絵画の揮毫、詩論、画論などの交流もあり、訳官による日本語での和歌や発句のやりとりまでもしている。接待にあたる武士だけでなく、民間の知識層の人々の交流は実に活発で、今も数多くの文芸資料が、処々に見出される。

本稿では、新出のそうした資料を紹介すると共に、朝鮮通信使との文雅応酬を日本の漢学者たちが一生を通じての誇りとしたことや、韓日交互が異文化を意識することによって、さらに相互理解を深め、敬愛の念を強めていった家庭の一斑明らかにしたい。

## 一、「醴泉先生詩文鈔」皆川淇園序文

今般、「醴泉先生詩文鈔」という版本を新出本として発見することをえたが、同書は稀本の類に属する版本で、岩波書店刊行の『国書総目録』にも未収、書名すら知られていなかったものである。

宇野醴泉は、かつて日本の首相であった宇野宗祐氏(故人)の先祖にあたり、近江守山の名家であり、儒者として当時よく知られていた人物である。『大日本人名辞書』には次のようにあがる。

宇野醴泉(ウノ レイセン)近江の儒者、名は元章、字は成憲、近江守山の人、家世々土豪を以て郷曲に重んぜらる醴泉少にして学を好む博覧強記詩書を能くす屢々京師に遊びて台閣公卿に招かれ或は侯伯の賓師おなる性曠達にして物に拘はらず酒を好みて豪飲家産を事とせず人或は之を誘るも恬として顧みず江村北海根に往く途に守山を過ぎ大雨に遇ひて醴泉を訪ひ未だ寒暖を陳るには及ばずして忽せ醴泉の所在を失ひ之を家人に問ふに家人知らず少らくありて窓外に人あり先生々と連呼す北海驚て之を顧みれば醴泉衣を着け魚網を手にし挙体淋漓として笑て曰く君の枉願を辱す但々村居鮮魚なし故に行て河魚を網にするのみと其の曠達なる斯の如し醴泉の学必ず程朱ならず文必ず韓歐ならず諸れを古に求め隻字も苟もせず必ず微あり書法は趙吳興を宗とし殆ど真に逼る安永己亥秋病歿す年五十八、醴泉先生遺稿世に行はる栗田宮その名を聞き延て上客となす膳所侯亦屢々節を折り之と交ると云ふ(続近世叢語)

と、その人柄と学風についてが記されている。この宇野醴泉の『醴泉先生詩文鈔』には、京都の大儒皆川淇園の序文が備わっており、興味深いことが述べられている。次にその淇園序文の全文をあげる。

### 宇野元章遺集序

益余自少壯時素聞近江有宇野元章而未嘗一面明和初韓使来聘過京宿于本国寺余欲與筆語而造焉則元章亦適来在其坐因始得相識而咲談数刻意如旧故夜半出館乃共訂再晤而別爾後以隔地故遂再絶不相見回顧曼絶不相見回觀如昨今已近四十年矣項者其門人謀刻其遺集而需序于余日元章以安永己亥歿而距今已二十二年矣元章平生以博学及詩文鳴而栗田王延為上客膳所侯所屢折節與之交則其為人所重可知也且云其為人慷慨激烈舍己急人此其氣節所大與常人異独以其居與京師遠故其名不得大振四方云余既以往者僅一晤之故而心根其不繼為深交今及閱其遺集乃所未嘗不為之倦々願昔而以三致慨歎焉嗟乎以其賢如元章人々知之未能致其多者無乃所命乎於是聊為書以其感愴之所最焉云爾 寛政十二年庚申春正月望

平安 皆川愿撰昇書

### 宇野元章遺集序大意

かつて私が若い頃より近江の宇野元章の名を聞いていたが、いまだ一面識も得ることができないでいた。たまたま朝鮮通信使が京都を通り、本国寺を宿所とするので、彼らと筆談をしたいものだとでかけたところ、たまたま元章も来ていて、待ち時間の間に話に花が咲き、たちまち何時間もしゃべりこみ旧くからの知りあいのようなであった。

真夜中になって宿所にあてられた本国寺を出たが、以後、遠隔地のためついに再会することがなかった。今思うともう 40 年も経っており、この遺集を出版するとその門人たちがいうが、それも、彼が没して 22 年になる。元章は博学にして詩文で知られ青蓮院宮に、恩顧を受け、人物は慷慨激烈で、学才は京都だけでなく、広く知られた人であった。

この序文の注目すべきをいうと、序文を草した皆川淇園は、「韓使来聘」(英祖 40 年、明和元年の折の通信使)を生涯には再びは訪れぬ、朝鮮文人との雅文応酬の好機とし、通信使たち一行の宿泊所であった京都の本国寺を訪れたところ、近江守山から同じ目的でやってきていた宇野醴泉と初めての面識を得て、あ

たかも旧知の如く、数刻にもわたって談話に花が咲いたという。

同じ目的(朝鮮の文人たちの文雅応酬)の者が、初めて一座して、旧知の如く親しむというところに、当時の文人たちの心持ちや態度を偲ばせる者があるが、このことをもって淇園がその序文のエピソードとしたのは、朝鮮通信使との筆談や詩文応酬を当時の文人学者たちが人生における最も華やかで大切な雅事の披露場と考えたからに他ならない。己れの力量や日頃の学問の精進の如何が試される貴重な体験でもあった。詩・書・画について、また儒学(朱子を中心とした訓詁注釈の様々)に深く豊かな交流があり、まさに一期一会の出会いが通信使の人々と日本の儒者たちとなされたわけであるが、ここではまた宇野醴泉と皆川淇園の一期一会でもあった。

## 二、新出資料の詩箋をめぐって

近年入手した架蔵の詩箋には次のような詩が清書されている。

富士 奚疑

富士山崇冠日東  
声名越海異邦通  
回頭孤嶺夏雲上  
白雪猶新積碧空

これまで十点以上の通信使の人々による染筆の文芸資料を入手してきたが、ふつう朝鮮通信使の草したものには「朝鮮」と冠称したものが多い。また先に拙稿「朝鮮通信使の残した発句短冊について」(『日本文化学報』第9集、2000、8、韓国日本文化学会)で指摘したことであるが、朝鮮紙の荘紙を料紙と用いたものが多い。これは異邦の日本人は、異国(朝鮮)の料紙の方が珍しく感じるからで、贈る側、贈られる側とすれば当然のことであろう。

しかし、ここであげた「富士」と題して奚疑なる雅号の人物の草した詩箋は、彩色下絵入りの高級な料紙ではあるが、日本の紙、和紙である。また『体系朝鮮通信使』などの諸書にあたってみたが、管見では「奚疑」という人名、雅号は見出すことができなかった。

だが、この詩箋の筆者は朝鮮通信使と違って間違いないと思われる。理由は次の2点である。

- 1、七言絶句の用語中に「日東」また「声名越海異邦通」といった語や章句のみえること。
- 2、朝鮮通信使は、富士山が名峰であるとのことを、先の通信使たちの見聞記、紀行文などから知識として得ており、苦しい旅程中にも最も期待された風景美で、詩文の題材として特に好まれた。

「日東」の語はよく使われる語で、享保己亥の折には、日本人の通詞水足仲敬が「貴国隣好好みを脩て星輶既我日東に向ふことを切に儀封請見之苾有是に於て涉し水陸一百数十里の難険を跋」と自国をさしているほどに通信使の人々には言いならされた話である。また、寛延元年度の通信使の製述官南玉(号秋月)の「酔晋齋書帖」の録後の冒頭に「日東多好奇子」の語があったり、金仁謙の訪日紀行録の書名が『日東壯遊歌』であるなど、あげれば枚挙にいとまない。

2、については、李元植氏による「延享度の文化交流と筆談唱和・遺墨資料について」(『体系朝鮮通信使』第6巻)のなかで、既に次のような指摘がある。

また、江戸を往復するたびに、富士山を目のあたりに眺めながら、いつも話題になるのは、富士山と金剛山の自慢話であった。

対馬の真文役として享保度と正徳度の二回にわたって通信使に同道した雨森芳洲はいう。「わが国の人、富士の勝という者、常に傲色あり、韓客必ずその金剛を挙げて以て鋭を折るの資となす、

韓客富士を観るもの、山巔雪あるを疑うことを致さざることなし、あるいはおもえらく、これ白石ならん、あるいはおもえらくこれ必ず白雲ならんと、よってその疑いを致すをみれば、彼国、金剛山というもの夏月雪なく、その高きことわが富士に及ばず、従って知るべし(原漢文)と。また正使の書記洪鏡湖は「我国名山甚だ多し、しかして、その最も奇にして大なるものは金剛山なり、富岳もまた神特にして奇秀清淑なるも金剛山には及ばざるのみ、神異の事多き故に、中国の人、願わくば東国に生まれて金剛を一見せんの話あり、宇宙の名山恐らくこの山と面を争うもの無きのみ」と啖呵を切る。金剛山は韓国山水面の題材となっていた。実に一万二〇〇〇峰あるといわれるだけに、無数の個性のある峰々の姿が調和し、千変万化の興味をかもしだすのである。

延享度の書記柳醉雪が、接伴僧承堅和尚の富士山詩に和韻し「富士定知下風拝」と、富士山の金剛山の下位におくべきだと詠んでいるところは面白い。

とあって、富士山が通信使の人々に大変に好まれた詩題となっていたことがよくわかり、その遺墨にも例は少なくない。詩箋を贈られた側にも、自国の名峰が称えられたことは誇らしく、他国の人が誉めたこともうれしく、互いに風景美に心を通わせたことと思われる。

注目されるのは、静岡・清見寺蔵の「山水花鳥図屏風」は金有声筆で6曲一双のものであるが、その屏風には花鳥図の他に、金剛山図があり、金剛山の一峰ずつに名が書き込まれている。霊峰金剛山の粉本を金有声が持参していたことがわかる。おそらく日本の文人・画人の多くも、これを目にすることとなったであろう。

こうした詩文中の用語や章句中の語句に注目するならば、従前それとは知られずに埋もれたり、看過されている資料にも、朝鮮通信使随行員の文人たちのものがまだまだ数多くあって、それらを見出す方法の一つとして、この2、は見逃してはならないであろう。

朝鮮通信使の随行員は多い時には400名にもその数はのぼったというが、上官や中官は別として、その前後十二回の全随行員の名簿も無く、随行員名簿には見当たらぬのに随行が確実な人があったりすることで、研究上から洩れた人物がかなりあるようでもある。そうした点からも、より細やかな注意を払い一点一点の地道な調査研究が必要かと思われる。

## 結びに

富士山の題詠詩箋は、通信使の人々にとって新奇な題材であったし、日本人を喜ばせるものであった。

そして、朝鮮通信使の人々の心のなかにあったのは、日本人の誇る富士山に対して、自国の名峰である金剛山への誇りであった。

それらがかえって富士山の詩材を豊かにし、富士山の題詠のなかから、金剛山への敬愛を語りかけることとなっていた。やがて、そのことから、日本人もまだ見ぬ金剛山のことを知り、思いを馳せ、通信使の人々の思いを理解する手がかりを得るのだった。

そうしたことが、各々のいささか子供っぽいまでのお国自慢から生じてきて、それが相互の理解へと進

んでいく過程こそ、文治をめざした朝鮮時代と江戸時代の善隣友好にふさわしい姿であり、文事・文雅をもって人の和をはかる文人の交流は真の意義や意味をもっていたといえよう。

## <参考文献>

○仲尾宏・辛基秀編(1994)『大系朝鮮通信使』、明石書房、第6巻112～113頁、7巻82、11

2頁

○(1993)『朝鮮通信使往来』、労働経済社、91頁

○映像文化協会編(1979)『江戸時代の朝鮮通信使』、毎日新聞社、196頁

○京都文化博物館編(2001)『こころの交流 朝鮮通信使』、京都文化博物館・京都新聞社、9

3頁

○大日本人名辞書刊行会編(1980)『大日本人名辞書』、講談社学術文庫、369頁

○仲尾宏(1993)『朝鮮通信使と江戸時代の三都』、明石書店、80～81頁

○和歌山市立博物館編(1981)『朝鮮通信使と紀州』、和歌山市立博物館、57頁

○朴賛基(2001)『朝鮮通信使と日本近世文学』、韓国日本学協会、92頁

○東京国立博物館編(1985)『特別展示 朝鮮通信使近世200年の日韓文化交流』、東京国立博物館、44頁

K C I

# Crosscultural Communication through Poems

Suga, Shuji

## ABSTRACT

Sharing Chinese characters made possible the cultural exchange between Korean diplomatic delegates and Japanese Sinologists during the Edo period. The intellectuals of both countries interchanged the Chinese poems that they made when the delegations came to Japan. This paper focuses on how they communicated with each other by analyzing Shisen, the pieces of paper on which they wrote out their Chinese poems. Specifically, by reading Japanese poems with Mt. Fuji as their theme the Korean delegates entered into the Japanese feelings and knew their culture. On the other hand, the Japanese scholars understood the Korean feelings by recognizing a comparison of Mt. Fuji to Mt. Kongo〔金剛山〕. These materials of Shisen suggest the actual peaceful and even cheerful atmosphere that they created.

